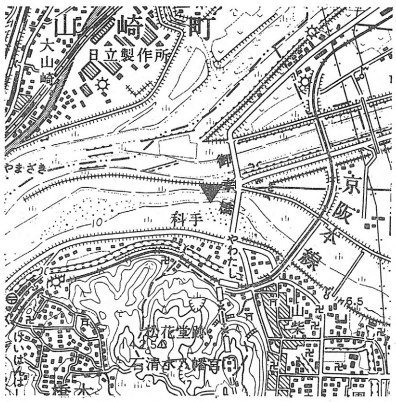
京都・木津川河床遺跡

1　所在地　京都府八幡市（木津川河川敷）
2　調査期間　一九八七年（昭62）三月一日表採
3　発掘機関　京都野尻湖友の会（代表　鈴木一久）が表採
4　調査担当者
5　遺跡の種類　集落跡
6　遺跡の年代　旧石器時代～近世
7　遺跡及び木簡出土遺構（表採地）の概要

木津川河床遺跡は、現在の木津川に沿う国道一号線木津川大橋の下流から八幡の御幸橋下流にかけて、東西四km、南北一kmの範囲に存する。この遺跡は現地表が標高九～一〇mで、京都盆地内で最も低湿地に属する遺跡である。遺跡の東側には巨椋池干拓地が広がる。巨椋池には木津川、宇治川、桂川などが流入し、水深が一～三mと浅いので、これらの川の流入水量と土砂量



（京都西南部）

に応じて、池の拡大・縮小がくりかえされた。このため、木津川河床遺跡では、常に水の脅威と恩恵を受けながら、弥生時代、古墳時代後期およびその後近世まで断続的に集落が形成されてきた。

今回報告する木簡は、木津川の御幸橋の下流一〇〇mの河川敷で表採されたものである。木簡は、一八六八年の洪水以降に形成された厚さ一～三mの砂層の下にある青色粘土層の上部で、突き刺さった状態で見つかった。木簡表採地点から南東に二m離れた場所で、同じ層位内から牛と馬の各部位の骨や歯（京都大学理学部地質学鉱物学教室収蔵）が出土し、七m北方では黒漆塗りで鶴と松が描かれた椀、中世の擂鉢片が、さらに二m北で九七六～九九七年鋳造の北宋銭太平通宝一枚がやはり同じ層位内から表採されている。遺物から考えて、木簡表採地付近は中世の集落端の低湿地に相当するものと推定される。

表採されたこれらの遺物は、埋蔵物発見届出書を提出の上、京都府立山城郷土資料館で保存処理を施した後、収蔵している。

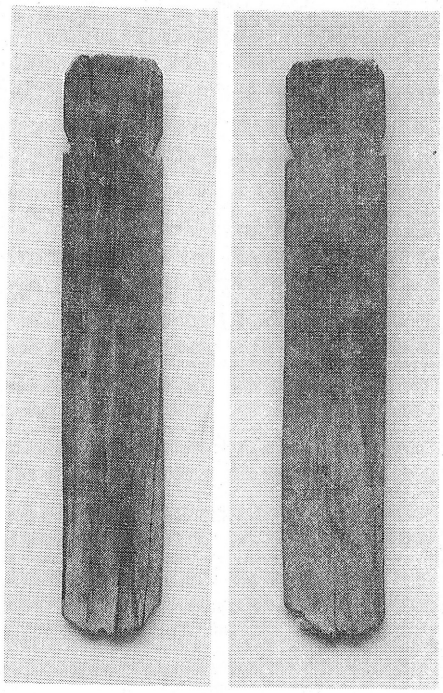
8　木簡の釈文・内容

(1)　・「〈　□□為□□□　　(95)×16×2　039
　　・「〈□□□　□

木簡の裏面には四文字分の梵字らしきものが認められるが、詳細は不明である。

なお、木簡の釈読、赤外線テレビの使用などに際して、奈良国立文化財研究所の寺崎保広氏のご助力を得た。

（橋本清一）



裏　面　　表　面